研　究　成　果　報　告　書

令和２年　８月　24 日

１．所属・職・氏名　等

国際教育学科・専任講師・Nordstroem Karl Johan

２．研究課題（テーマ）名

戦前の映画史

３．研究期間

2019 年４月１日から 2020 年３月 31 日まで

４．利用した研究費の種類及び金額

若手教員研究促進交付金　500,000 円

５．研究の概要

①　「日本映画史」

本研究は戦前の東京を拠点とした「映画製作所Ｐ・Ｃ・Ｌ」の発展についてである。無声映画からトーキー映画への移行は、映画史における最も重要な出来事である。戦前の東京を拠点とした「映画製作所Ｐ・9C・Ｌ」の発展について、今までの研究を元に、Ｐ・Ｃ・Ｌが 1930 年代半ばから日本映画界の製作制度、いわゆる映画プロダクション・システムにどのような影響を与えたかを調査研究する。このプロダクション・システムとＰ・Ｃ・Ｌの映画製作制度に研究対象を絞るため、 Ｐ・Ｃ・Ｌと戦前の東宝に映画プロデュースが具体的にどんな役割を齎して、映画業界にどのような影響を与えたのかを検証する。日本を代表する映画会社である東宝に発展するＰ・Ｃ・Ｌの作品群が日本映画界に与えた影響は多大である。当研究は、海外でも国内でも先行研究が少ないこの史実に着目し、散逸しがちな資料を再構築し、国際的且つ学際的論考を試みるものである。「映画製作所 Ｐ・Ｃ・Ｌ」の発展についての研究は数年間に続くプロジェクトですが、令和元年にプロダクション・システムについては完成する予定です。

②　「スウェーデン映画史」

1990 年代後半から再度、スウェーデン映画の新黄金時代が始まったとよく言われる。特に新世代の若い監督達が活躍したことから高い評判を受けた。また同じ時期、スウェーデン政府の映画に対する支援の規則が大きく変化してきた。数年間連続して、このスウェーデン映画の新黄金時代の発展について、様々な視点から検証するつもりです。

６．研究成果等

「日本映画史の研究」

・研究計画どおり、2019 年度中に日本の戦前の電気サウンド・カルチャーと映画文化の論集の最終編集が完成した。原稿は Amsterdam University Press 出版社に渡して、2020 年 10 月出版予定。
・日本の映画プロデュース制度について、新しく手に入れた資料の検査を行った。その結果、これからの研究の行うべき順番（所謂、これからの研究計画の構成）が明らかになった。
・後期中は映像資料と紙資料を調査して、データベース形に整理する作業を行った。

「スウェーデン映画史の研究」
・研究計画どおり、8 月中にスウェーデンで戦後のスウェーデン映画の二回目の黄金時代(特に 1950 年代から 1960 年代まで)の映画産業とテレビ産業とそれに関連した一次資料を調査し、その中でも 30 本の映画を特に細かく検討した。検討の結果としては二回目の黄金時代についての知識が高まった。特にその黄金時代から外れた庶民的な娯楽映画と黄金時代の優れた傑作の比較ができて、スタイルの違いと関連が前より明らかになった。

7．研究の実績（論文・発表　等）

共編著『The Culture of the Sound Image in Prewar Japan』　Amsterdam University Press、2020 年 10 月、担当章「The Image of the Modern Talkie Film Studio: Aesthetics and Technology at P.C.L.」